

初期マルクスの自然価格・市場価格論（つづき I）

——『経済学・哲学草稿』「第一草稿」を中心に——

岡 崎 栄 松

目 次

- 〔1〕 はじめに
- 〔2〕 「第一草稿」前段における二つの「自然価格」とそれらの欄配置
- 〔3〕 「第一局面」A 「資本の利潤」欄の検討（以上、本号所載）
- 〔4〕 「第一局面」B 「地代」欄の検討（以下、次々号所載予定）
- 〔5〕 「第一局面」C 「労賃」欄の検討
- 〔6〕 「第二局面」A 「地代」欄の検討——むすび

〔1〕 はじめに

筆者は、最近の拙稿「初期マルクスの自然価格・市場価格論——『スミス抜粋第一ノート』を中心として——」（本誌、第41巻第1号、1992年4月）において、『諸国民の富』第一編第七章～第十一章からマルクスが、アダム・スミスの自然格価・市場価格論にかんするどのような文章をどのような形で（それらの順序や強調の仕方なども含めて）「スミス抜粋第一ノート」に抜き書きしているかを吟味・検討したが、その結果として、およそ次の諸点が明らかになった。

(1)アダム・スミスの「自然価格」概念は二重であって、〈平均賃金＋平均利潤＋平均地代〉を含意する第一の「自然価格」は『諸国民の富』第一編第七章「諸商品の自然価格と市場価格について」で詳細に論述され、後続の三章、すなわち第八章「労働の賃金について」、第九章「資財の利潤について」および第十章「労働と資財のさまざまな用途における賃金と利潤について」は、その

延長線で詳しく考察されている。(2)この意味での「自然価格」は、およそ自由競争が完全におこなわれるかぎり、「いっさいの商品の価格がたえずそれに引きつけられている中心価格」であり、日常的な市場価格の運動の「重心点」をなすものといえることができる。(3)ところが、A. スミスの第二の「自然価格」概念は「十分な価格」(= \langle 前貸資本(いわゆる『第四の部分』を含めての)補填分+平均利潤 \rangle)を意味するものであって、この場合には、地代は商品の「通常の価格」がこの「十分な価格」を超えたさいの「余剰」だとされる。(4)スミスのこのような所論は第十一章「土地の地代について」に至ってはじめて詳しく展開されることになる。(5)スミスは「自然価格」についての自説のこうした変更には彼自身、感づいており、また初期のマルクスも、この点にかんするスミスの文章をたんに抜粋するだけでなく、それに強調の縦線を引いて強く注目していたのであった。

さて、本稿ではわれわれは、『経済学・哲学草稿』(「第一草稿」前段部分)には「スミス抜粋第一ノート」からどういう文章が転載・採録され、またそれらは当時のマルクスによってどのような文脈のなかでどういうふうに使われていたか、といった諸点を考察しなければならない。ここで私は『経哲草稿』「第一草稿」の前段部分といったが、マルクスが「スミス抜粋第一ノート」から、自然価格・市場価格論にかかわる抜粋文(または要約文)を転載し自説の展開に役立てているのは、ラーピンのいう「第一段階」の「第一階程」と「第二階程」の一部分との範囲内においてであると考えられる。そこで、まずわれわれは同じ範囲内におけるマルクスのオリジナル・ノートの状態をやや詳細に見ておくことにしよう。

(注) ここで念のために、ラーピン論文の当該箇所(N. I. Lapin, *Vergleichende Analyse der drei Quellen des Einkommens in den "Ökonomisch-philosophischen Manuskripten" von Marx*, *Deutsche Zeitschrift für Philosophie* Jg. 17, Heft 2, 1969, SS. 197-198. 細見 英訳「マルクス『経済学・哲学草稿』における所得の三源泉の対比的分析」《思想》岩波書店, 1971年3月号, 101~102ページ。なお〔訳者まえがき〕同ページ参照)を引いておけば次のとおりである。

「……1843年末から1844年8月までのマルクスの経済学研究の、二つの主要段

階を結論づけることは容易である。第一段階——経済学の著作との最初の出会いから、第一草稿を書きあげるまで。第二段階——リカードゥ、ミルらの著書の抜粋（第四、第五抜粋ノート）から、第三草稿の仕上げまで。／第一段階は、さらにいくつかの小段階に分けることができる。(イ)経済学の著作（エンゲルス、ブルードン、その他2、3人の人々の論稿）との最初の出会い。(ロ)セー、スカルベク、スミスの著書からの抜粋（第一、第二、第三抜粋ノート）。(ハ)所得の三源泉の分析（第一草稿の前段）。(ニ)疎外された労働の本質にかんする思想の形成と展開（第一草稿の後段）。

なお、ここに「第一草稿」のオリジナル原稿ページを示しておこう。

「第一草稿」前段

「第一階程」（原稿 I～VII ページ）

「第二階程」（原稿 VIII～XVI ページ）

「第三階程」（原稿 XVI～XXI ページ）

「第一草稿」後段の「疎外された労働」断片（原稿 XXII～XXVII ページ）

ところで、(1)『経哲草稿』「第一草稿」が九枚のフォリオ全紙^{ボーゲン}（十八葉、三十六面）の束から成り、その各面がマルクスによってローマ数字でページづけされており（I-XXXVI）、そしてそのうち XXVII ページまでが使用されていること、(2)また各使用ページが原則として二本の縦線で三欄に分けられ、各欄には通例マルクスの自筆で「労賃」、「資本の利潤」および「地代」という表題が記されていたこと、(3)また、三欄中、「資本の利潤」欄だけがマルクス自身の手で四つの項目——(一)資本、(二)資本の利得、(三)労働にたいする資本の支配と資本家の動機、(四)資本の蓄積と資本家間の競争——に分けて書かれていたことなどの点は、いまでは周知のところだといえよう。そしてラーピンの考証によれば、マルクスは「第三階程」を除く二つの「階程」では、大体において「資本の利潤」→「地代」→「労賃」という順序で本文を書きすすめていったということであった。その後、山中隆次氏はアムステルダムの「社会史国際研究所」での調査研究の結果、オリジナル原稿 VI ページにかんして、「このページは、ラーピンがみずからの『利潤』先行説を裏づけようとした p. I ときわめて対照的な特徴をもっている。というのも、ここでは『労賃』欄と『利潤』欄を区別する、最初にひいた縦線の右側に、もう一本新しく縦線がひかれ、したがって

『利潤』欄を犠牲にして、『労賃』欄の内容がゆったりと書かれているからである」（『経済学・哲学草稿』と『抜粋ノート』の関係——ラーピン論文によせて——）《思想》1971年11月号、107ページ）云々と述べて、このページでの執筆順序の、『資本の利潤』欄にたいする『労賃』欄の先行性を主張された。^(注)

（注）山中氏のこの主張については、さしあたり拙稿「いわゆるラーピン論文とその公表直後の波紋——執筆順序の問題を中心として——」本誌、第39巻第6号、1991年2月、117-118ページを参照されたい。なお、この点にかんする山中説は、沢野 徹氏（「初期マルクスの経済学批判——『経済学・哲学草稿』前段の市民社会分析——」《専修経済学論集》第11巻第1号、1976年9月、とくに118-119ページ）、工藤秀明氏（「原・経済学批判としての1844年『草稿』分析序説(上)——マルクスの『生産諸力』概念の研究(序)——」《経済科学》名古屋大学、XXV-4、1978年3月、124ページ）、渋谷 正氏（「『国民経済学』批判の端緒の形成——『経済学・哲学手稿』〈第一手稿〉をめぐって——」《研究年報『経済学』》東北大学、1978年10月、67ページ）、清水耕一氏（「若きマルクスの国民経済学批判における論理と視角——『経済学・哲学草稿』第一草稿前段の研究——」《経済学論叢》同志社大学、第27巻第5・6号、1979年11月、95ページ）らの諸氏によっても、はやくから支持されていた。

ところで、新メガ第Ⅰ部第2巻（編集責任者はインゲ・タウベルト女史）では『経済学・哲学草稿』が二様の形で、すなわち「成立段階」（＝執筆順序）にしたがって編集された「第一の再版」と、なによりも「論理構造」を基礎として編集された「第二の再版」とが収録されているが、そして以下われわれはもっぱら前者をテキストとして使うが、それはともかく、この前者においても「第一草稿」の「第一階程（Erstes Stadium）」——これを新メガでは「第一局面（Erste Phase）」と呼ぶのだが——Vページの「資本の利潤」欄は、マルクスの見出し(三)「労働にたいする資本の支配および資本家の動機」の終りまでのところで、ひとまず区切られるとしている。





この場合は、まえにも述べたように（前記拙稿、前掲誌、117-118ページ参照）、オリジナル原稿Vページの「利潤」欄が少しだけ余白を残して同VIページのそれは完全に空白となり、だからまた、そこの最初にひいた縦線の右側に、もう一本新しく縦線をひいて「労賃」欄をひろげることが可能となる。もともと、

ラーピンの「階程」区分は欄ではなくページで区切るところに無理があったのであり、この点、欄ごとで区切る新メガ I/2 の「局面」区分方式のほうがより合理的で自然だと思われるので、以下では私は、この「局面」方式を採用ことにする。

（注） この点は、ラーピン自身が次のように述べて認めていた。

「作業階程の境界を行数についてまで正確に確定することは必ずしもできない……。しばしばマルクスはある項の叙述を中断して、その欄を最後までうめていない。そしてつぎにその中断した文章にたちもどるとき、彼は書いた文章にすぐつづけて、同じ欄で、新しい階程の作業を始めている。このような場合、前の文章と新しい文章の内容上ならびに筆跡上の特徴によって、たいていは確実に二つの階程の境界をつきとめることができるけれども、ときにはこのような確実さの存在しないこともある。このことは、とくに『資本の利潤論』と『地代論』の第一階程と第二階程の境界についてあてはまる」（*Vergleichende Analyse.*, SS. 197-198. 前掲訳, 107ページ。力点は引用者）。

上述の諸点をふまえながら、また新メガ第 I 部第 2 巻の『付属資料 (*Apparat*)』を参考にしながら、当該ページ (I~XI ページ) をそれぞれ特徴づけると次のように図示できるであろう。^(注)

（注） Vgl. *Marx/Engels Gesamtausgabe*, Erste Abteilung, Band 2, *Apparat* (= *MEGA*®, I/2, *Apparat*), Dietz Verlag, Berlin, 1982, SS. 707-709. ここでは「第一局面」は  で、「第二局面」は  , 「第三局面」は  , また「第四局面」は  でそれぞれ示されている。なお、オリジナル原稿 I ページで「資本の利潤」欄と「地代」欄を分かち二本の縦線のうち点線のほうは、いわば廃止されたものであり、また原稿 VI ページの「労賃」欄と「利潤」欄を分ける二本の縦線についても同様である。さらになお、各原稿ページの A, B, C は推定される本文執筆の順序を示す。ただし、これは必ずしも規則どおりではない。

これらの「局面」に立ち入るまえに、ここでわれわれは、以前にラーピンが指摘していた「二つの信ずべき里程標」のことを想起すべきである。すなわち、まずラーピンはこの二つの「里程標」を次のように特徴づけていた。「(1) [オリジナル原稿] VII ページは、他のページと同じくあらかじめ三つの違った表題のつけられた三つの欄に区切られているけれども、にもかかわらず本文は、一

<p>I 労賃 (Arbeitslohn) C</p> <p>本文内容 ————— 労賃</p>	<p>資本の利潤 (Profit des Capitals) A</p> <p>(一) 資本 本文内容 ————— 資本</p> <p>(二) 資本の利得 本文内容 ————— 利潤</p>	<p>地代 (Grundrente) B</p> <p>本文内容 ————— 地代</p>
<p>II 労賃 (Arbeitslohn) C</p> <p>本文内容 ————— 労賃</p>	<p>資本の利潤 (Profit des Kapitals) A</p> <p>本文内容 ————— 利潤</p>	<p>地代 (Grundrente) B</p> <p>本文内容 ————— 地代</p>
<p>III 労賃 (Arbeitslohn) C</p> <p>本文内容 ————— 労賃</p>	<p>資本の利潤 (Capitalgewinn) A</p> <p>本文内容 ————— 利潤</p>	<p>地代 (Grundrente) B</p> <p>本文内容 ————— 地代</p>
<p>IV 労賃 (Arbeitslohn) C</p> <p>本文内容 ————— 労賃</p>	<p>資本の利得 (Gewinn des Capitals) A</p> <p>本文内容 ————— 利潤</p> <p>(三) 労働にたいする資本の支配と資本家の動機 本文内容 ————— 利潤</p>	<p>地代 (Grundrente) B</p> <p>本文内容 ————— 地代</p>
<p>V 労賃 (Arbeitslohn) C</p> <p>本文内容 ————— 労賃</p>	<p>資本の利得 (Capitalgewinn) A</p> <p>本文内容 ————— 利潤</p> <p>(四) 資本の蓄積と資本家間の競争 本文内容 ————— 利潤 C</p>	<p>地代 (Grundrente) B</p> <p>本文内容 ————— 地代</p>
<p>VI 労賃 (Arbeitslohn) A</p> <p>本文内容 ————— 労賃</p>	<p>資本の利得 (Capitalgewinn) C</p> <p>本文内容 ————— 利潤</p>	<p>地代 (Grundrente) B</p> <p>本文内容 ————— 地代</p>

VII 労賃 (Arbeitslohn) A 本文内容————— 労賃	資本利得 (Capitalgewinn) B 本文内容————— 労賃	地代 (Grundrente) C 本文内容————— 労賃
VIII 労賃 (Arbeitslohn) 本文内容————— 労賃	資本利得 (Capitalgewinn) B 本文内容————— 利潤	地代 (Grundrente) A 本文内容————— 地代
IX 労賃 (Arbeitslohn) 本文内容————— 労賃	資本利得 (Capitalgewinn) B 本文内容————— 利潤	地代 (Grundrente) A 本文内容————— 地代
X 労賃 (Arbeitslohn) 本文内容————— 労賃	資本利得 (Capitalgewinn) B 本文内容————— 利潤	地代 (Grundrente) A 本文内容————— 地代
XI 労賃 (Arbeitslohn) 本文内容————— 労賃	資本利得 (Capitalgewinn) 本文内容————— 利潤	地代 (Grundrente) A 本文内容————— 地代

つの項——労賃の項——だけにかんする文章でうずめられている。この項の、著者〔マルクス〕自身の言葉で書かれた本論は、すでにこのページで終わっている。(2) XIII～XVI ページは、三つの欄ではなく、あらかじめ『労賃』と『資本の利潤』という表題がつけられた二つの欄に分かれている。本文もこの二つの

の項だけにかんするものである（労賃の項の文章は XV ページで終り、利潤の項の文章は XVI ページで終わっている）（*Vergleichende Analyse.*, SS. 200-201. 前掲訳, 106 ページ）。

さらにラーピンは、この「里程標」について、それは「平行する三つの欄をうめていったマルクスの作業全体を、三つの主要階程に区分する」（力点はラーピン）もののだとして、次のように述べていた。「第一階程——『労賃』論の前半（オリジナル原稿 I-VII ページ）と、『資本の利潤』論の前半ならびに『地代』論の始めの部分（I-VI ページ）。第二階程——『労賃』論の後半（VIII-XV ページ）と『資本の利潤』論の後半（VIII-XVI ページ），ならびに『地代』論の続きの部分（VIII-XII ページ）。第三階程——『地代』論の最後の部分（XVI-XXI ページ）」（*Ebenda*, S. 201. 前掲訳, 106-107 ページ）。

ラーピンのいう「信ずべき里程標」のうち第一の「里程標」（原稿 VII ページ）については、すでに述べた。すなわち、「資本の利潤」欄は VI ページではなく、V ページの第 3 節「労働にたいする資本の支配と資本家の動機」までで「第一局面」の「利潤」欄は終るということであった。

つぎに、第二の「里程標」についてであるが、ラーピンの場合、これはただ欄が二分されているということだけがメルクマールにさかれていて、各欄の内容上の考察がなされていない。たとえば「資本の利潤」欄の第 3 節の終りの部分では資本家階級の利害と社会の一般的利害の不一致という点が力説されている。この点は「労賃」欄では、その終りの部分で、「国民経済学者によれば、労働者の利害は社会の利害にけっして対立するものではないのに、社会はつねに、そして必然的に労働者の利害に対立するのだ」（*MEGA*^②, I/2, S. 206. 前掲訳, 26 ページ）と明言されている。だが、「地代」欄ではオリジナル原稿 VI までのところではその問題がまったく言及されていない。「地代」欄でそれがとりあげられるのは「第二局面」になってからである。そこにおいてはマルクスは、たとえば「……スミスは、地主が社会のすべての利益を収奪するということから、地主の利害はつねに社会の利害と一致する、と結論しているが、それはばかげたことである」（*Ebenda*, I/2, S. 211. 前掲訳, 70 ページ。力点は引用者）と言

きている。

だから、「第一局面」と「第二局面」とを区別するのが適当だとすれば、マルクスは「第二局面」の「資本の利潤」欄(四)「資本の蓄積と資本家間の競争」よりも前に「第二局面」の「地代」欄の執筆にとりかかったのではないかと私には思われる。というのは、「地代」欄で大土地所有と小土地所有との競争、その結果としての前者による後者の併呑の問題、等々がとりあげられるのは、地主階級の利害が社会の一般的利害と対立することを見たあとのことだからである。私がさきに、「第二局面」をAとBにわけて「地代」欄のほうをAとし、執筆順序の点でその「地代」欄のほうが先だと考えたゆえんである。

〔2〕「第一草稿」前段の二つの「自然価格」とそれらの欄配置

ところで、「スミス抜粋第一ノート」（これを以下、たんに「スミス・ノート」と略称する）における「自然価格」および市場価格にかかわる抜粋や要約は、『経哲草稿』「第一草稿」前段部分（とくに上掲の「第一局面」および「第二局面」、オリジナル原稿I-XIページ）では、どのように活用・利用されているのであろうか。ここでわれわれは結論を先取りすれば、スミスの二重の「自然価格」概念のうち、第一の「自然価格」は「資本の利潤」欄および「労賃」欄の「第一局面」で、また他方、第二の「自然価格」は「地代」欄の「第一局面」と「第二局面」においてそれぞれ活かされているといえよう。

そこで、こんどはわれわれはこの点を立ち入って検討・考察してゆかねばならないのだが、そのまえに、ここでわれわれは「スミス・ノート」からマルクスが一連の章句を「第一草稿」前段部分へ転載・活用するにさいしての彼の基本的立場を見ておこう。——それは、この「ノート」作成直前の1843年末から翌44年1月にかけて執筆され、A. ルーゲとの共編《独仏年誌》第一・二合併号、1844年2月に公表された、かの「ヘーゲル法哲学批判 序説」の結論部分に端的に示されているとみてよからう。すなわち、「突然やってきた産業の運

動をとおして、ようやくドイツにとって生成しはじめている」プロレタリアート、市民社会のどんな階級でもないような市民社会の一階級、あらゆる身分の解消であるような一身分、その普遍的苦悩のゆえに普遍的性格をもち、なにか特殊な不正ではなしに不正そのものをこうむっているためにどんな特殊な権利をも要求しない一階層」(Vgl. *Marx/Engels Werke* (=MEW), Bd. 1, Dietz Verlag, Berlin, 1972, S. 390. 『マルクス=エンゲルス全集』第一巻, 大月書店, 427ページ。力点はマルクス)——このようなプロレタリアートこそが「普遍人間的解放」の担い手となりうる, というのであった。ところで、マルクスが『経哲草稿』「第一草稿」を執筆するさいエンゲルス「国民経済批判大綱」から強い影響を受けたことはいうまでもない。そのころのエンゲルスは、マルクスと同じく、やはり「現実的人間主義」の立場——エンゲルス自身の言葉でいえば「純人間的・普遍的な基礎から出発する見地」(MEW, Bd. 1, S. 502. 『全集』①, 545ページ。力点は引用者)——をその思想上の基本的立場としていた。そしてエンゲルスは、「競争の矛盾は私有財産そのものの矛盾とまったく同一である」(Ebenda, S. 513. 前掲訳, 557ページ)としながら、こうした競争論的視角——といっても、それは競争現象重視の視角であるとともに「競争の矛盾」^(注)の視角でもあった——から、「大綱」においては「国民経済学」のさまざまなカテゴリーを考察したのであった。

(注) この「競争の矛盾」にかんするエンゲルス自身の説明を掲げておけば、次のとおりである。——「すべてを所有することが各個人の利益であるが、各人が平等に所有することが社会の利益である。こうして、一般的利害と個人的利害とは、真正面から対立する。競争の矛盾は、各人は独占を望まざるをえないのに、社会そのものは独占によって損失をうけ、したがってそれを遠ざけねばならない、という点にある」(Ebenda, SS. 513-514. 前掲訳, 557-558ページ。力点は引用者)。

なお、この点については拙稿「初期エンゲルスの価値論および分配論について——『国民経済学批判大綱』(1844年)を中心として——」岡崎栄松・大島雄一編『資本論の研究』日本評論社, 1974年所収, 19-21ページを参照されたい。

ラーピンは、こうした点を指摘して次のようにいっている。——「エンゲルス論文〔「大綱」〕との最初の出会いのさいにはマルクスは、当時かれ自身も

っとも関心をよせていた問題に、すなわち、労働と資本の関係の問題、資本主義社会の基本法則としての普遍的競争の問題に、とくに着目していたのであった。……いずれにせよ、まさしくこの種の問題領域では、エンゲルスの『大綱』が所得の三源泉の断片におよぼした影響がはっきり読みとれる」（*Vergleichende Analyse*, S. 198. 前掲訳, 104ページ）。

ところで、「資本の利潤」欄で「自然価格」という用語がはじめて出てくるのは、マルクスのオリジナル原稿 III ページにおいてであるが、これが〈平均賃金+平均利潤+平均地代〉を意味する第一の「自然価格」であることは、「スミス・ノート」のうち、圧倒的にこの意味での「自然価格」が叙述されている『諸国民の富』第一編第七章「諸商品の自然価格と市場価格について」からの一連の抜粋文との関連でそれがとりあげられていることから明らかであろう。すなわち、マルクスは、「資本家は、競争の少ない場合にはそれを利用しつくして多くの利益をあげることが許されるが、そうしたすべての利益のほかに、実直な仕方、資本家は市場価格を自然価格以上にたもつことができる」（*Ökonomisch-philosophische Manuskripte aus dem Jahre 1844*, MEGA[®], I/2, S. 196. 城塚 登・田中吉六訳『経済学・哲学草稿』岩波文庫, 1964年初版, 43ページ。力点はマルクス, ゴシックは引用者) として次のように述べている。「第一に、市場がそれに関係する人々の住所からきわめて遠いところにある場合には商業上の秘密によって、すなわち価格の変動、価格の自然的水準以上への高まりを秘密にしつづけることによって。つまりこの秘密保持は、他の資本家たちもまたその資本をこの部門に投入しないという効果をもっているのである。つぎに、資本家がより多くの利潤をあげながら供給するようになる、製造業上の秘密によって。——（秘密保持による欺瞞は不道徳ではないか。取引所における取引【も同様だが^(注)】）。——さらに、生産が特定の地方に限定されていて（たとえば高価な葡萄酒のように）有効需要がけって充たされない場合。最後に、個人や会社による独占によって。独占価格は可能なかぎりでの最高の価格である」（MEGA[®], I/2, SS. 196-197. 前掲訳, 43-44ページ。力点はマルクス。Vgl. MEGA[®], IV/2, S. 344）。

（注）ここでマルクスは、「秘密保持による欺瞞は不道德ではないか。取引所における取引〔も同様だが〕」と評注しているが、この評注は当時のマルクスの「現実的人間主義」の立場からのものといえよう。そして「大綱」におけるエンゲルスもまた、この同じ立場から、たとえば「不道德の極致は有価証券取引所投機であって、このために歴史は、また歴史とともに人類は、打算的あるいは冒険的な投機者の食欲をみたす手段に引きさげられる」（*MEW*, Bd. 1, SS. 515-516. 『全集』①, 559-560ページ）と語っている。

もとより、マルクスは、「スミス・ノート」から『経済学・哲学草稿』への転載・採録にあたっては、かならずしも「ノート」の抜粋文を一字一句忠実に転記しているわけではなくて、強調の仕方の変更、番号づけの挿入、省略や削除、等々が見られるし、また「ノート」には頼らないで直接、仏訳『諸国民の富』から抜粋したと思われる場合もあるのだが、それはとにかく、さきの「自然価格」が〈平均賃金＋平均利潤＋平均地代〉を意味する第一の「自然価格」概念であったことは、上掲の具体例の文章を読めば、明らかなるところであろう。というのは、スミスの場合、第七章では、自由競争が完全におこなわれていれば、賃金、利潤および地代が、それぞれの「自然率」＝「平均率」にひきつけられて「自然価格」が成立するが、商業上・製造業上の秘密保持や独占によって自由競争が妨げられると、商品の市場価格が比較的長期にわたって「自然価格」＝〈平均賃金＋平均利潤＋平均地代〉以上にたもたれることになることとされていたからである。

さて、つぎに「地代」欄であるが、ここではマルクスは一転して、〈資本補填分＋平均利潤〉を含意する第二の「自然価格」論を展開する。いま、この点をいわば典型的に示していると思われる二つの文章をここに引用することにしよう。

(i) —— 「土地の生産物のなかでふつう市場へもたらされうる部分は、その通常の価格が、それを市場へもたらすために使用された資本を、この資本の通常の利得とともに回収するのに十分な価格のものだけである。もしその価格がこれより以上に達するときは、超過分は当然、地代となる。価格がぎりぎりそ

れに足りるだけであるならば、商品は市場に運ばれるだろうが、しかしそれは地代を支払うには足りない。価格がそれに足りるより以上であるかないか。それは需要に依存する」（*MEGA*®, I/2, SS. 199-200. 前掲訳, 67ページ。力点は引用者。Vgl. *MEGA*®, IV/2, S. 354）。

ここでのスミスの主張内容は、こうである。——土地生産物が「ふつう市場へもたらされうる」条件は、その「通常の価格」が「十分な価格」（＝資本補填分＋平均利潤）に達しているということである。そしてもしこの「通常の価格」がこれ以上に高ければ、その「超過分」は当然、地代になる、けれども「通常の価格」が「十分な価格」以上でなければ、「たとえ商品は市場に運ばれるだろう」が、しかし「それは地代を支払うには足りない」と。つまり、この場合には、地代は最初から「十分な価格」あるいは第二の「自然価格」からは排除されているわけである。

(ii) ——「地代は、労賃および資本の利得とはまったく別の仕方で、商品の価格の構成にはいりこむ。給料 (*Salaire*) および利潤の額の高低は、商品の価格の高低の原因である。地代の額の高低は価格の結果である」（*MEGA*®, II/1, S. 200. 前掲訳, 67ページ。力点はマルクス。Vgl. *MEGA*®, IV/2, S. 354.）。

さきに第一の「自然価格」概念を説いたさいのスミスは、自由競争の諸条件のもとでは賃金、利潤および地代はいわば様に「商品の価格の構成にはいりこむ」と主張していた。ところが、いまやスミスは、地代だけを別扱いにして、それは「需要」の強弱によって「商品の価格の構成にはいりこむ」場合もあれば、そうでない場合もあると説く。そして『草稿』当時のマルクスは、「地代」欄ではスミスのこうした所説を採用するのである。

さて最後に、「労賃」欄は「利潤」欄と同様、第一の「自然価格」概念を基調として論述される。この点は、同欄ではマルクスが次のように書いていることから知られるところである。

「……労働者の生活を左右する需要というものは、富者と資本家の気まぐれによって左右される。供給の量が需要を超過するとき、価格を構成する諸部分、すなわち利潤、地代、労賃のうちの一つがその価格〔＝自然率〕以下に支払わ

れ、したがってこれらの諸給付のうちの一部は、そうした使用から引きあげられることになり、こうして市場価格は中心点としての自然価格へと引き寄せられる」（MEGA^②, I/2, SS. 191-192. 前掲訳, 18ページ。力点は引用者）。

マルクスがこのようにいうとき、スミス『諸国民の富』第一編第七章「諸商品の自然価格と市場価格について」から「スミス・ノート」へ抜粋した一連の諸章句のうち、わけても次の文章を念頭に思い浮かべていたことは疑問の余地がないであろう。——「もしこの量〔供給量〕がしばらくのあいだ有効需要を超過するならば、その価格の構成部分のあるものは、自然率以下で支払われるにちがいない。……もしそれが賃金または利潤であれば、前者のばあいには労働者の利益が、また後者のばあいにはその雇主の利益が、かれらを刺激し、即刻にも彼らの労働なり資財なりの一部分をこういう仕事から引きあげさせるであろう。市場にもたらされる量は、まもなくちょうど有効需要を充足するに足りるだけのものになるであろう。その価格のすべては、その自然価格に上昇し、また全価格もその自然価格に上昇するであろう」（MEGA^②, IV/2, S. 343.）。

見られるように、これは「自然価格」（＝〈平均賃金＋平均利潤＋平均地代〉）が市場価格の運動の重心点となるというスミスの第一の、本来的な「自然価格」概念にもとづく議論そのものであり、したがって前掲の「第一草稿」前段の「第一局面」C「労賃」欄の所論はこの系譜に属するものと予想してさしつかえないであろう。

さきにわれわれが、第一の「自然価格」概念にもとづいて議論が展開されているのは「利潤」欄と「労賃」欄においてであり、第二の「自然価格」概念が現われるのは「地代」欄に至ってであると述べたゆえんである。

しかし、ここで疑問が生ずるであろう。というのは、〈平均賃金＋平均利潤＋平均地代〉を内容とする第一の「自然価格」と、〈資本補填分＋平均利潤〉を意味する「十分な価格」＝第二の「自然価格」とは、明らかに異質な概念であり、それらを同じ『経哲草稿』「第一草稿」前段部分にいわば同居させることは、もともと不可能なことだと考えられるからである。前稿で見たように、A. スミスも、また初期のマルクスも、二重の「自然価格」のちがいについて

は明確に自覚していたのであり、その点を彼らは文章化してもいたのだが、しかし彼らは、この二重の「自然価格」の相違性を認めるにとどまっていて、両者の排他性にまでは想到しえなかったものと思われる。しかも彼らは労賃と利潤の相違性を力説していたので、労賃と地代、利潤と地代の相違性を考察すれば足りると考えたのであろう。こうして彼らは、同一次元で労賃、利潤および地代の「対比的分析」に従事することになったものと察せられる。

ちなみに、ここであらかじめ断わっておくが、われわれは初期マルクスの自然価格・市場価格論を「競争の矛盾」の視角とのかかわりで考察するので、その考察領域は本来の自然価格、市場価格論の範囲をかなり超えることにならざるをえない。つまり本稿では、その検討範囲を諸階級の特殊的利害と社会の一般的利害との関連の問題にまでひろげざるをえないわけである。

〔3〕 「第一局面」 A 「資本の利潤」欄の検討

さて、われわれは「第一局面」 A 「資本の利潤」欄の内容をあらためて検討することにしよう。マルクスは、この欄の第一節「資本」の冒頭で、「資本、すなわち他人の労働の生産物にたいする私有は、なににもとづくのか」と設問し、これに J. B. セーの『経済学概論』第一巻に次のように、すなわち「資本そのものが、もとをただせば盗みとか詐欺にもとづくものではないとしても、とにかく相続財産を神聖化するためには、やはり立法の協力が必要である」と答えさせる（Vgl. MEGA², I/2, S. 189. 前掲訳, 39ページ, 参照）。さらにマルクスは、「どのようにしてひとは生産基金の所有者になるのか。どのようにしてひとは、この基金を媒介としてつくりだされる生産物の所有者になるのか」と問うて、同じく『経済学概論』第二巻から「……実定法によってである」（力点はマルクス）との回答を引き出す（Vgl. ebenda, S. 189. 前掲訳, 39ページ, 参照）。

こうして、資本の起源の問題を——セー『経済学概論』からの引用によって答えさせる形で——とりあげたマルクスは、こんどは、資本の実質的な力とい

ったものを問題にして、「ひとは資本とともに、たとえば大資産の相続とともに、なにを獲得するのか」との問いを発する。そしてこれにたいしてアダム・スミス『諸国民の富』第一編第五章からの次の一文——それはあらかじめ「スミス・ノート」中に書き抜かれていたのだが——を転載する。「たとえば、大資産を相続する人は、そのことによって、じつは直接に政治的な力を獲得するのではない。……この〔財産の〕所有が、彼にただちに直接にもたらす力の種類は、購買する力（*die Macht zu kaufen*）であり、他人のすべての労働にたいする、またはそのとき市場にあるこれらの労働の全生産物にたいする命令権（*ein Recht des Befehls*）である」（Vgl. *ebenda*, S. 190. 前掲訳, 39-40ページ, 参照。力点およびイタリックはマルクス。Vgl. *MEGA*^②, IV/2, S. 330.）。

この引用文につづけてマルクスは、「資本」の本質を規定して次のようにいう。——「したがって資本は、労働とその生産物にたいする支配権（*Regierungsgewalt*）である。資本家がこの権力をもつのは、彼の人格的ないし人間的な諸特性のためでなく、彼が資本の所有者であるかぎりでの話である。彼の資本のもつ購買する権力（*die kaufende Gewalt*）には、なにものも対抗できないのだが、この購買する権力が彼の権力なのである」（*Ebenda*, S. 190. 前掲訳, 40ページ。力点およびイタリックはマルクス、ゴシックは引用者）。

ここでわれわれは、「大資産を相続する人」にかんする前掲のスミスの一文は、まだ資本家や土地所有者が出現する以前の社会状態についての叙述である点に注意する必要がある。この点を考慮すれば、上のスミスの文章からして、マルクスが、「したがって資本は、労働とその生産物にたいする支配権である」（力点はマルクス、ゴシックは引用者）といい、また「……資本のもつ購買する権力」（力点はマルクス）について語るのは、いささか強引にすぎるといわざるをえない。それはともかく、ここでマルクスが、「資本」のもたらす力にかんしてそれは「労働とその生産物にたいする支配権」（力点はマルクス、ゴシックは引用者）であると規定し、また「彼〔資本家〕の資本のもつ購買する権力には、なにものも対抗できない」（力点はマルクス）と強調しているのは、当時のマルクスが、労働にたいする資本の優位性を説いているものとして十分注意すべき

であろう。またわれわれは、ここでマルクスが、「資本家がこの権力をもつのは、……彼が資本の所有者であるかぎりでのことである」（力点はマルクス）と説いているのは、このころのマルクスが、はやくも唯物論的に資本家を資本の人格化としてとらえている点でも注目すべきであろう。

（注） 前掲の A. スミスの引用文についてマルクスが、「……資本は、労働とその生産物にたいする支配権である」（力点はマルクス）とか「資本のもつ購買する権力」（力点はマルクス）云々といい、「支配」と「購買」とをしばしば同義語と見なしているの、スミスの前掲引用文をもって、あたかもスミスがそこで支配労働説を論じているものと解する傾向が往々にしてみられる。残念ながら、たとえば山中隆次氏は、この文章のことを「……支配労働価値説にもとづくスミスのホップズ命題解釈」——スミスはこのパラグラフの文頭を『ホップズ氏がいうように、富は力である』という一文から書きはじめている——と呼び、さらに次のように述べておられる。

「この『諸国民の富』第一編第五章ではスミスはまだ独立の商品生産者間の商品交換を前提とし、投下労働量＝支配労働量の認識を一方で保持しつつ、この『富は力なり』のホップズ命題の解釈を通して、富の本質を他人の労働ないし労働生産物にたいする支配ととらえ、支配労働価値説への傾斜を示している。これはやがて第六章での資本制社会分析への重要な伏線と考えられるが、そのことをマルクスの抜粋は、いち早く洞察したものとみることができよう」（『初期マルクスの経済学研究（Ⅱ）——パリ時代の『スミス抜粋』を中心に（その1）——』《商学論纂》中央大学、第27巻第3・4号、1985年11月、143ページ。力点は引用者）。

ここで山中氏が「第五章ではスミスはまだ独立の商品生産者間の商品交換を前提」しており、「投下労働量＝支配労働量の認識」をもっていたと主張されるのは、そのとおりでいえよう。しかし氏が、スミス（およびマルクス）のホップズ命題解釈にかんして、当時のマルクスは「支配労働価値説への傾斜」を示していたとか、スミス（したがってマルクス）によるホップズ命題解釈は「支配労働価値説にもとづく」ものであったと主張されるのは、どうであろうか。

上掲の引用文——および他の類似の若干の文章——でスミスが強調しているのは、社会的分業と交換がおこなわれるとともに起こる変化、すなわち富の大きさが自己労働ではなくて、いまや他人の労働またはその生産物にたいする支配の量に依存するようになる、そしてこの場合、支配労働量は投下労働量に正確に等しくなる、という点である。だから上掲引用文を山中氏のように、スミス支配労働説の展開を示す一文と解するのは、遺憾ながら不適切といわざるをえない。

なお、この点については後年、マルクスがスミス価値論を詳しく検討した個所(Vgl. *Theorien.*, *MEW*, 26/1, SS. 46-47. 『学説史』, 『全集』②⑤ I, 56-57ページ参照)を熟考すべきである。

さて、つぎにマルクスは、あらためて「資本とは何であろうか」と問い、「スミス・ノート」から『諸国民の富』第二編第三章の要約文——「〔それは〕蓄積され貯蔵された労働の一定量である」(*MEGA*②, I/2, S. 191. 前掲訳, 40ページ。Vgl. *MEGA*②, IV/2, S. 360.)を抜き出している。そのうえでマルクスは、「資本とは貯蔵された労働である」(*Ebenda*, S. 191. 同上, 40ページ。力点はマルクス)と定義しなおしている。この場合、マルクスがエンゲルス「大綱」の次の一文、すなわち「経済学者自身が資本とは『蓄積された労働』であることをみとめているのであるから、資本と労働とが同一物であることはただちにわかる」(*MEW*, Bd. 1, S. 508. 『全集』①, 522ページ。力点は引用者)という一文を参考にしていることは明らかであろう。

それはともあれ、*MEGA*②, I/2, *Apparat*, S. 713 採録のマルクス・オリジナル原稿 I ページの写真を見ればわかるように、「第一草稿」前段の「利潤」欄にはマルクス自筆の四つの見出しのうち、(一)「資本」および(二)「資本の利得」は本文を書いた後から追記したものである。そして(二)「資本の利得」は、上掲の「資本とは貯蔵された労働である」(力点はマルクス)の文章を書いた直後の位置に挿入されているから、第二節はここからはじまるとしなければならぬ(注)であろう。

(注) 『経済学・哲学草稿』が1932年にはじめてアドラツキー編集のもとで公刊されたとき、この「第一草稿」前段「利潤」欄の第二節「資本の利得」という見出しは上掲最後の文章の行につづけて「あとから挿入されていた」が、「内容的にはここ〔四行あと〕が適している」(*MEGA*①, I/3, *Berlin*, 1932, S. 53. 力点はメガ編集部)として、この見出しの位置をそのようにいわば後へずらして以来、後続の諸版もほとんどすべてそのように印刷していた。そしてこの点は最近の*MEGA*②, I/2 所収の二つのテキスト(第一、第二の再版)も同様である。しかし、このあとすぐ引用する文章を読めばわかるように、この見出しはマルクスの指示どおりに印刷しても、いっこうに不適切とは思われない。なお、この点につ

いてはラーピン論文（*Vergleichende Analyse*, S. 205, Anm. 9. 前掲訳, 118ページ, 注10）および渋谷論文（前掲誌, 65ページ, 注4）を参照されたい。

ところで、「第一局面」A「利潤」欄の第二節「資本の利得」は、「基金（*fond*）、すなわち資財（*stock*）とは土地と製造労働の生産物のあらゆる集積である。資財は、その所有者に収入あるいは利得をもたらす場合にだけ資本（*Kapital*）とよばれる」（*MEGA*®², I/2, S. 191. 前掲訳, 40ページ。力点およびイタリックはマルクス。Vgl. *MEGA*®², IV/2, S. 357.）という文章で始まっている。

このように、マルクスは「資財」と「資本」とは「その所有者に収入あるいは利得をもたらす」かどうかで区別されるとするのだが、しかし、こうした区別は実際には必ずしも守られていない。

「利潤」欄の第2節「資本の利得」は、さらに「資本の利得」を特徴づけて次のようにいう。

「資本の利潤あるいは利得は、**労賃**とはまったく異ったものである。この相違は二重の仕方です。まず第一に、たとえ種々の資本についての監督や指揮の労働が同一のものであるとしても、資本の利得は使用された資本の価値によって完全に規制される。次につけくわえられることは、大工場ではこのすべての労働は一人の主要な役員に託されるが、彼の俸給は、その運用を彼が監督している資本とは、なんら比例するものではない、ということである。たとえば、いまそこでは所有者の労働がほとんど無にひとしいといえるにしても、それにもかかわらず彼は、彼の資本に比例する利潤を要求する」（*MEGA*®², I/2, S. 191. 前掲訳, 40-41ページ。力点はマルクス、ゴシックは引用者。Vgl. *MEGA*®², IV/2, S. 341.）。

ここではマルクスは明らかに、「資本の利潤」と「資本の利得」とをまったく同義語として使っているといつてよい。この点にかかわって『経哲草稿』（岩波文庫）の訳者たち、つまり城塚 登・田中吉六両氏は、第二節の見出しに注記して次のように述べている。——「ここでマルクスは *Der Gewinn des Kapitals* と書き、この欄全体の表題である『資本の利潤』*Profit des Kapitals*

とは異なる語を用いている。そのため、『資本の利得』と訳したが、マルクスにとって外来語である Profit と本来のドイツ語である Gewinn とは、ほとんど同一の意味内容を示すものと受けとられていたと思われる」(『経哲草稿』「利潤」欄への注5, 前掲訳, 250ページ)。

城塚 登・田中吉六両氏のこの注記はまことにもっともなものというべきであろう。だが、ここでわれわれは、前掲引用文でマルクスが「労賃」といっているのは本来の意味での「労賃」とは違って「監督労働」の「俸給」を指していること、そして利潤は「使用された資本の価値によって完全に規制される」点、および「大工場ではこのすべての労働〔監督労働〕は一人の主要な役員に託される」ので、資本所有者の「労働がほとんど無にひとしい」が、にもかかわらず「彼は、彼の資本に比例する利潤を要求する」という点を力説していることに注意すべきである。

つづけてマルクスは、「なぜ資本家は利得と資本との間のこの比率を要求するのか」との問いを発して、これに A. スミスに次のように答えさせている。——「もし資本家が労働者たちの製造物の売却によって、労賃のために前払いされた基金を償うに必要な以上のものを期待できなしたら、彼は労働者たちを雇う興味をなんらもたないだろう。また、もし使用された基金の大きさに彼の利潤が比例しないならば、少量の基金よりも大量の基金を使用することについてなんの興味をもたないだろう」(MEGA^②, I/2, SS. 192-193. 前掲訳, 41ページ。力点はマルクス。Vgl. MEGA^②, IV/2, S. 341.)。

これは、まことに説得的な所説だといえよう。それはともかく、さらにマルクスは、「スミス・ノート」から利潤にかんする次の文章を転載する。「……このように、諸資本の利得を正確に決定することは不可能であるが、それにもかかわらず、それについての一つの観念を貨幣利子にもとづいてつくることはできる。貨幣によって多くの利得を生むことができるならば、それを使用する能力にたいして多くの利子をつけられ、もし貨幣の媒介によってえられる利得が少なれば利子も少ない。通常の利子率が純利得の率にたいして保持しなければならぬ割合は、利得の上昇または下落とともに必然的に変動する。大プリ

テンでは、利子の二倍が、『妥当な、中庸な、合理的な利潤』と商人たちが名づけているのだと算定されているのであるが、これは通常の、また慣用的な利潤以外のなものにも意味しない表現なのである」（MEGA^②, I/2, SS. 193-194. 前掲訳, 42ページ。力点はマルクス。Vgl. MEGA^②, IV/2, SS. 350-351.）。

こうしてマルクスは、「諸資本の利得」についての「観念」を「貨幣利子にもとづいてつくることはできる」として、スミスにしたがって、大ブリテンでは利子の2倍が「通常の、また慣用的な利潤」だと見なしてよい、とするのである。

ところで、さきにわれわれは、「第一局面」A「利潤」欄は第一の「自然価格」概念を基調として書かれていること、そしてこの第一の「自然価格」概念は〈平均賃金＋平均利潤＋平均地代〉を意味していることを指摘しておいた。しかし、『経哲草稿』でのマルクスは利潤の平均率よりもむしろその最低率および最高率のほうに多大の関心を示している。

事実、マルクスは「利潤の最低率はどのくらいか」と問い、それに答えて次のようにいう。——「資本の通常利得の最低率は、資本のいっさいの使用がこうむる偶発的な損失を償うに必要な額よりも、つねにいくらか多くなければならない。この剰余がもともと利得あるいは『純利潤』（le bénéfice net）である。利子率についても事情は同じである」（MEGA^②, I/2, SS. 194-195. 前掲訳, 42ページ。力点はマルクス。Vgl. MEGA^②, IV/2, SS. 349-350.）。

さらにマルクスは、利潤の最高率はどのくらいかと問うて、スミスに次のように答えさせている。——「通常の利得の達しうる最高率は、大多数の商品において、地代の全部を食いつくしてしまい、納品される商品の〔なかにふくまれた〕労賃を最低の価格にまで、すなわち労働期間中の労働者のたんなる生存費にまで引き上げたときの率である。労働者は、日々の仕事にやとわられているかぎり、つねにどうにかして養われているにちがいないが、地代はまったく無くしてしまうことができる。その例、〔インドの〕ベンガルにおける〔東〕インド貿易会社の使用人たち」（MEGA^②, I/2, SS. 195-196. 前掲訳, 43ページ。力点はマルクス、ゴシックは引用者。Vgl. MEGA, IV/2, S. 350.）。

ここでいう「労賃(Arbeitslohn)」は、さきの「監督労働」の「俸給(Salaire)」とはちがって、「最低の価格にまで、すなわち労働期間中の労働者のたんなる生存費にまで引き上げたときの率」である。そしてこの労賃は、労働者が「日々の仕事にやとわれているかぎり」支払われねばならないが、しかし、スミスによれば「地代はまったく無くしてしまうことができる」のである。そして「通常の利得の達しうる最高率」は、スミスの考えでは、こうして「地代の全部を食いつくしてしまい」、かつ労賃を「最低の価格にまで、すなわち労働期間中の労働者のたんなる生存費にまで引き上げたときの率」(力点はマルクス)である。

しかし、これは第一の「自然価格」概念を説いていたさいのスミスの所説とは根本的に違っているといわねばならない。というのは、そのさいのスミスは、「もしある場合にこの量〔市場へもたらされるある商品の量〕が有効需要を超過すれば、その価格の構成部分のあるものは、自然率以下で支払われるにちがいない。もしそれが地代なら、地主の利害関係が彼らを刺激し、即刻にもその土地の一部を引きあげさせるであろうし……」(*An Inquiry into the Nature and Causes of the Wealth of Nations*, ed. by Edwin Cannan, 6th edn., London, 1950, vol. I, p. 59. 大内兵衛・松川七郎訳『諸国民の富』岩波文庫, 第一分冊, 206ページ, 力点は引用者)といい、また彼は、「ある商品の市場価格が、たとえ長く自然価格を上回ることはあっても、ひきつづき長くそれを下回ることはめったにありえない」(*Ibid.*, vol. I. p. 64. 前掲訳, 第一分冊, 215ページ)として、こうも述べていた。

「自然率以下に支払われるのがどのような部分であろうとも、その利害関係に影響をこうむる人々は、ただちに損失だと思ひ、その土地、その労働またはその資財のいずれかを、その用途からただちに引きあげるであろうから、市場へもたらされる量は間もなく有効需要をちょうど充足するに足りるだけになるであろう。それゆえ、その市場価格は間もなく自然価格にまで上昇するであろう。すくなくとも、完全な自由がおこなわれていたところでは、これが事実であろう」(*Ibid.*, vol. 1, p. 64. 前掲訳, 第一分冊, pp. 215-216. 力点は引用者)。

したがって、スミスが前掲の引用文中で「地代の全部を食いつくしてしま

い」云々とか、「地代はまったく無くしてしまうことができる」とかいうのは、少なくとも彼が第一の「自然価格」の立場を捨て去って、はじめから地代を排除する第二の「自然価格」概念の立場へ、いわば先廻り的に移行しているというほかはない。

ところでわれわれは、「第一局面」の「利潤」欄でスミスから抜粋・転載したさいのマルクスの立場を典型的に示す文章にたちかえろう。念のためにその文章を再びかかげておけば次のとおりであった。——「資本家は、競争の少ない場合にはそれを利用して多くの利益をあげることが許されるが、そうしたすべての利益のほかに、実直な仕方では、資本家は市場価格を自然価格以上にたもつことができる」（前出、力点はマルクス）。そしてマルクスは、「市場価格を自然価格以上にたもつ」方法として、(1)商業上の秘密、(2)製造業上の秘密、(3)生産が特定の地方に限定されている場合（たとえば高価な葡萄酒製造のように）、(4)個人または会社による独占、これらを列挙していた。

つづけてマルクスは「スミス・ノート」から次のように転載している。

「ある商品がより多く加工され、より多く製造業の対象とされるようになればなるほど、労賃と利潤に分解される価格の部分は、地代に分解される部分に較べて大きくなる。この種の商品にたいする手工労働が進歩するにつれて、利得の数が増すばかりでなく、後続の利得は、いずれも先行の利得より増加する。なぜなら、その利得が由来する資本が必然的にいつも、より大きいからである。亜麻布職工を働かせる資本は、紡績工を働かせる資本よりもねに必然的に大きい。なぜなら、前者の資本は後者の資本をその利得つきで回収するばかりでなく、なおそのうえに織工の給料を支払うからである。——そして利得は資本にたいしてつねに一種の比例をたもたなければならないのである」（MEGA^②, I/2, SS. 198-199. 前掲訳, 44ページ。Vgl. MEGA^②, IV/2, S. 342）。

この文章には、「スミス・ノート」としては珍しくマルクス自身の次のような評注がつけられている。——「（これは大変な誤りだ。というのは、千人の織布工が一人の紡績工の生産物を加工することもありうるからである。織布工を使う総資本がより大きくなければならないということだけは正しい。）」山中隆次氏はマルクスの

この注記にたいして「……『千人の織布工』と『一人の紡績工』の数字は逆でなければならないであろう」と指摘しておられる（前掲・山中論文，前掲誌，147ページ）が，山中氏のこの指摘は当を得ていると思われる。

それはともあれ，マルクスは上掲の文章につづけて次のようにいっている。「したがって，人間的労働が自然産物や加工された自然産物についてなしとげるこの進歩は，労賃を増大させるのではなく，一方では利得をあげる諸資本の数を，他方では前段の各資本に比して後段の各資本を増大させる」（MEGA^②，I/2，S.190. 前掲訳，44-45ページ）。

これらの文章を読むとき，われわれは，当時のマルクスが，資本主義の進展とともに賃金よりも利潤（ないし，その源泉としての資本）のほうがより早いテンポで増大すると見ていたことを窺い知ることができよう。

さてマルクスは，「利潤」欄の第三節「労働にたいする資本の支配および資本家の動機」を，「スミス・ノート」からの次の一文をもってはじめる。「資本を，ほかをさしおいて農業に，それとも製造業に，それとも卸業または小売業のある特定部門に投ずるかということ，資本所有者にきめさせる唯一の動機は，彼自身の利潤という観点である。これら種々の使用の仕方のそれぞれが，どれほど多くの生産的労働を実動させるか，あるいは彼の国の土地と労働の年々の生産物にどれほど多くの価値をつけ加えるか，ということの計算はけっして彼の考慮に入らない」（MEGA^②，I/2，SS.200-201. 前掲訳，45-46ページ。力点はマルクス，ゴシックは引用者。Vgl. MEGA^②，IV/2，S.364）。

見られるように，ここでマルクスは，資本投下の特定分野を「資本所有者にきめさせる唯一の動機は，彼自身の利潤という観点」以外の何ものでもない引用・強調しているのだが，この点の指摘は，のちにリカードゥが力説したところであり，またこの「第一草稿」でもマルクスがそのオリジナル原稿 XIII ページでリカードゥの当該所説を要約・引用したところでもあった。すなわち，「その国民の収入が純収入であり，実質収入であるならば，そしてその小作料および利潤が同一でありさえすれば，その国民が一千万の個人によって構成されるか，あるいは一千二百万の個人によって構成されるかということは，重要

なことであろうか」（Vgl. *MEGA*^②, I/2, SS. 221-222. 前掲訳, 57-58ページ参照）というリカードの所説がそれである。

このあとマルクスは、「スミス・ノート」から次のような一文を引用する。

「労働のもっとも重要な運用は、資本を使用する人たちの計画と思惑とにしがって規制され管理される。そして、これらすべての計画や運用において彼らが前提としている目的は利潤である。したがって利潤率は、地代や労賃のように、社会の繁栄につれて上昇したり、その衰退につれて低下したりするものではない。その反対に、この率は自然に富国では低く、貧国では高いのである。そしてこの率は、もっとも急速に破滅へとつき進んでいる国においてもっとも高い。したがって、この階級の利害は、他の両階級（労働者階級および地主階級^(注)）の利害が社会の一般的利害との間にもっているような結びつきを、もっていない。……商業または製造業のある特殊な部門を経営する人々の特殊な利益は、一定の点で公衆の利害とはつねに異なっており、またしばしばそれに敵対してさえいる。商人の関心はつねに、市場を拡大することと売り手の競争を制限することにある」（*MEGA*^②, I/2, SS. 201-202. 前掲訳, 46-47ページ。力点はマルクス、ゴシックは引用者。Vgl. *MEGA*^②, IV/2, SS. 356-357.）。

（注） スミスは、このように地主階級の利害は「社会の一般的利害」と調和的な「結びつき」をもっているとして、地主の階級の利害を弁護したのであったが、のちに見るように、この点では、マルクスはきっぱりとスミスを批判して、彼の見解は「馬鹿げたこと」とする。

このように、『経哲草稿』におけるマルクスは、「利潤率は、地代や労賃のように、社会の繁栄につれて上昇したり、その衰退につれて低下したりするものではない」から、「利潤」によって生活する人々の階級の利害は、「労賃」で生活する人々の階級とは異なって、「社会の一般的利害」と一致することはなく、むしろ「しばしばそれに敵対してさえいる」と説くのである。